

クラシックは面白い — その 14

ESSAY  
エッセイ

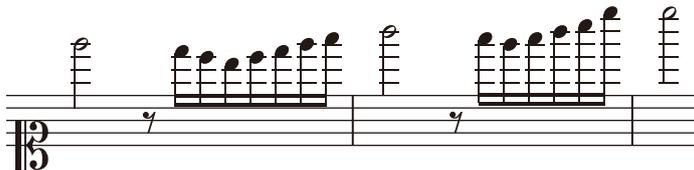
## ピアノのお話 VII

ピアノの蓋を開けると白と黒の鍵盤が並んでいます。あの鍵は何個あるのか、数えたことはありますか。現代のピアノは 88 鍵ですね。初期のピアノは鍵の数が少なく、モーツァルトの譜面を見ると最高音は、



なんです。

モーツァルトはこれより高い音は使いませんでした。ということは当時のピアノではこれより高い音は出なかったということでもあります。この音はへという音ですが、このくらいの音なら人間の声でも出せます。モーツァルトの《魔笛》というオペラでは“夜の女王”の役のソプラノがこの高さを歌います。現代ではこの高さの声を出せる人は少なくなりましたが、モーツァルトの頃にはもっと高い声を出せるソプラノがいました。14歳のときにイタリアのボローニャで会ったバスタルデッラという歌手は



このような超高音をモーツァルトの前で歌ってくれたと手紙に書いてあります。その最高音は先ほどのへの音より 5 度も高いドの音です。もちろん当時でもこれだけ高い音を出せる人は少なかったでしょう——モーツァルトが驚いているくらいですから。同様に、当時のピアノでは、こんな高い音は技術的にムリでした。技術的というと…？ ピアノの中を覗くと、たくさんの弦が張ってあります。高い方の音は“ピアノ線”と呼ばれるスチールの線が張ってあります。高い音を出すためには、いろいろなことが関係します。例えば、強く引っぱって張るほど音は高くなり、緩めると音は下がります。弦は細い方が高い音がします。また弦の長さが短いほど高い音になります。弦の材質は柔らかいものより硬いものの方が高い音に向いています。といった条件を考え合わせると、ピアノで高い音を出すには、硬い材料（スチール）で作った細い弦を、短く強く張るということになってきますが、モーツァルトの頃は、高い音を出すための条件である硬い針金がありませんでした。で、ガット（羊の腸）の弦などを使っていたものです。

では低い音はどうかというと、これは高い音の反対で、弦を長く、太くしなければなりません。かと言って緩く張ったのでは、音がたるんでしまいますので、強く引っぱらないといけないのですが、太い針金といっても、縄のように太い針金では処置に困りますので、今ではスチールのピアノ線のまわりを銅の針金でぐるぐる巻きにした特別な弦を使っています。すばらしいアイデアですが、これも技術の進歩のおかげです。（つづく）

執筆／石井宏（音楽評論家）

ここから始まる、音楽と未来の冒険！

## ぎふ未来音楽展2018

ガラ・コンサート&シンポジウム

2018. 9/9 日 13:30 開場

14:00-15:30 ガラ・コンサート「未来へのファンファーレ」

16:00-18:00 シンポジウム「1000年後の世界と未来の音楽」

【ガラ・コンサートプログラム】

<未来へのファンファーレ>福島諭：《CRACK》for trumpet and computer（世界初演）

<春の歓び>メシアン：鳥たちの深淵（クラリネット独奏／板倉康明）

<夏の饗宴>宮田まゆみと日本の音世界（笙独奏／宮田まゆみ）

<秋の牧歌>武満徹：径（トランペット独奏／三浦彩夏）

<冬の情景>一柳慧 即興の彩（ピアノ独奏／一柳慧）

<未来へのフィナーレ>安野太郎：自動演奏器械とパイプオルガンと一人の演奏者の為の新作

作曲・ピアノ  
一柳 慧



©Koh Okabe

笙  
宮田 まゆみ



作曲・バネリスト  
三輪 眞弘



作曲  
福島 諭



作曲  
安野 太郎



バネリスト  
森田 順子



クラリネット  
板倉 康明



トランペット  
三浦 彩夏



モデレーター  
浦久 俊彦

チケ  
ッ  
ト

ガラ・コンサート&シンポジウム  
全席自由 2,000円 [サラマンカメイト 1,800円]  
※学生半額 (30歳まで)  
※未就学児の入場はご遠慮ください。

チケット  
発売中